

Newsletter

March 2026

<http://www.aack.info>

目次

9月にチジャンでスキーしてきました 安仁屋政武.....1	念願の笹ヶ峰ヒュッテを訪れて 浜名 純.....15
図書紹介 『民族植物学入門—アンデスからヒマラヤへ』 山本紀夫編著 斎藤清明.....11	旧友との邂逅— AACK と AACH 八木欣平.....16
北大・京大交流会（続） 京大山岳部とのご縁 小泉章夫.....13	AACH に感謝 横山宏太郎.....17
AACK との出会い 白石和行.....14	お詫びと訂正.....19
	事務局だより.....19
	編集後記.....20

9月にチジャンでスキーしてきました

安仁屋政武

経緯

タイトルを見ても“エ！？チジャンて何？どこ？”だろう。一発で判る人はほとんどいないと思う。南米チリのコンセプションの東、アンデスの3000m級の火山の西麓に位置するスキー場である。ベースのホテルには温泉があり、私が数年前から目を着けていたチリでは有数のスキー場である。

2025年8月25日から9月12日の日程で、2回目（1回目は2013年、AACK NL 67号、Dec. 2013）のグループでのチリ・スキーを企画して滑って来たので紹介する。今回行ったのは3回目（最初は2004年8月、パタゴニア調査の帰り）となるサンティアゴ郊外（40 km 弱）のファレジョーネス（Farellones）を基点とした3つのスキー場（ラ・パルバ La Parva、エル・コロラド El Colorado、ヴァジェ・ネヴァード Valle Nevado）に加えて、初めてとなるサ

ンティアゴの南約500 km、コンセプションの東約165kmの所に位置するネヴァードス・デ・チジャン（Nevados de Chillan、以下チジャンと略す）である（図1）。

メンバーは男2人、女4人の計6人。年齢構成は私が最年長で80才、最年少が67才と平均年齢75.5才の超高齢のジジババ・パーティとなった。6人の内4人（男2人、女2人）が山スキー屋、一人は指導員資格を持っていてゲレンデが主で山スキーはたまに、もう一人はゲレンデのみ。世間一般の感覚ではチリにまでスキーに行く年齢グループではないだろう。

準備

チジャンは数年前からネットでたまに見るようになり気になっていたスキー場である。3000m級の活火山の西斜面に古くから開設されたスキー場で、宿には珍しく温泉がある。昔

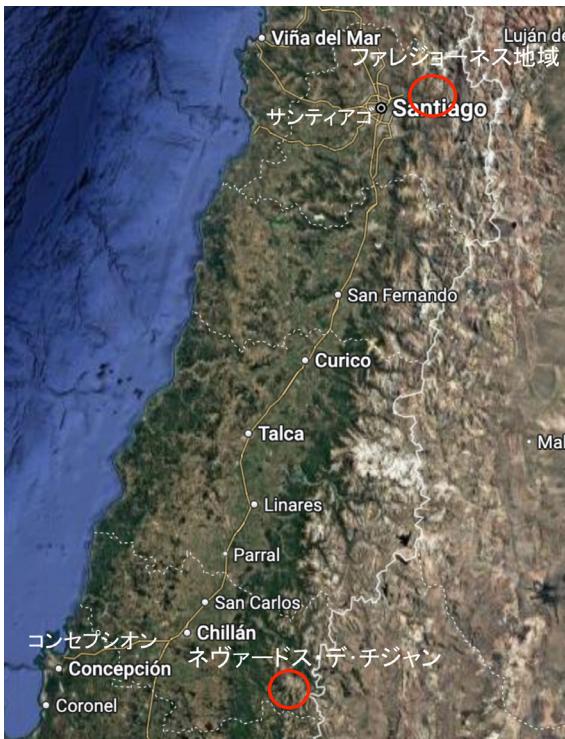


図1. ファレジョーネスとネヴァードス・デ・チジャンの位置。グーグル画像使用。サンティアゴとコンセプシオンの直線距離は約430km。

は Termas Chillan と呼んでいた。外国でスキーの後に温泉に入れる所は珍しいのではないだろうか。HPによるとスキー場の総面積は何と1万ヘクタールとある。標高差はリフトで行ける所で1100m、キャット・スキーあるいは歩いて登れば更に滑れる。最長滑走距離は南米最長の13kmとある。1万ヘクタールと言われてもピンとこない。参考までにニセコの花園・ヒラフが135ヘクタールとある。ニセコ全山が10個？以上のスキー場なんて全く見当がつかない。

行く先をチジャンとファレジョーネスと定め、スキーの後の観光はイースター島に決めて日程の決定や宿の手配など具体的な作業は3月に入って始めた。

チジャンの宿はサンティアゴ在住の友人(D)に取ってもらった。スペイン語でしか受け付けないので、彼女のアシストはとても助かった。

ファレジョーネスの宿は私の所で博士を取ったチリ人の留学生(G)が前回と同じ格安のアンデス・クラブの宿舎(Gaston Saavedra)を今回も取ってくれた。前は賄いがあったが、コロナの後賄いはなくなり全て自炊だという。

コックの手配を頼んだ。食料とアルコール飲料は彼が全て買い出ししてくれた。

以前はチリにはアメリカ経由で行っていたが、今回は面倒なアメリカ経由を避けてオーストラリア(シドニー)経由を選んだ。このルートを飛んでいるラタム Latam (運行はカンタス航空) はスキーなどスポーツ用品を預けるのに特別扱いせず、一律に Excess として USD150 を課することが判明。そこで、私がアイディアを出した。3本のスキーを一つにまとめて、Excess 荷物を2つにする。

予期せぬことにサンティアゴのホテルが問題となった。私が定宿にしていたホテル(大体の所は歩いて行ける)の周辺も治安が悪くなったから止めておくと異口同音にきた。友人達が言うに、「ここ数年でサンティアゴのダウン・タウンはとても治安が悪くなり危険になった。ほぼ毎日殺人事件が発生している。ベネズエラやコロンビアからの移民が増えて犯罪が多発し、地元のチリ人は寄りつかなくなった」。それで移動にメトロを使わなければならないが、少し郊外のプロビデンシアにあるホテルにした。

日程

8月26日(火) シドニー — サンティアゴ
— ファレジョーネス

前日25日の夜10:30に羽田を発ち(スキーの excess で一つ28,600円取られた)、シドニー経由でサンティアゴ着は予定通り10時頃。青空で気温は13℃と暖かい。空港は前来た時(2018年)から新しくなり、広くきれいになっている。しつこい荷物運び屋もいない!

元留学生のGがトラックとタクシーで迎えに来てくれていた。ATMで必要経費を引き出し、チリのSIM 1GB+50分(通話)を6,000ペソ(1,000円足らず)で買う。トラックにスーツケースとスキーを積む。彼が買い出した食料も積んである。3人ずつ分乗してファレジョーネスへ向かう。

高速道を下り、山の麓からジグザグ(34曲がり)で急峻な山を登っていく。途中の斜面には大きなサボテン(pipe organ cactus)を含むいろいろはサボテンが生えている。空港から約1.5時間、2時前にファレジョーネスのアン

デス・クラブの宿に着いた。標高約 2400m (サンティアゴは 480m ぐらい)。周りには前の週に降った大雪の名残の雪が残っている。

我々が着く前の週に大雪 (サンティアゴ市内は大雨) が降り、1m ぐらい積もった。この大雪のためその週の土曜日はサンティアゴ市内からファレジョーネスまで 10 時間かかったそう。それまでは雪が無く地肌が出ていたとのこと。地元の人からはとてもラッキーと言われた。

8月27日(水) 快晴：ラ・パルバでスキー

スキー場への送迎は宿舎の別な部屋に滞在しているブラジル人カシオがGのトラックを使ってやる。最大 4 人しか乗れないので 2 往復である。ラ・パルバとエル・コロラドは片道 10 分足らずなので問題ないが、ヴァジェ・ネヴァードは 25 ~ 30 分かかかるので 2 往復は大変だ。

初日は一番北にあるラ・パルバへ行く。日本のスキー場のようなスキーセンタービルはない。狭い階段を上るといきなりリフト。その奥にリフト券売り場の小屋がぼつんとある。このスキー場にはスーパーシニア (75 才以上) というカテゴリーがあり、リフト代はなんとただ! スキーパスと呼ぶ IC カードを 6,000 ペソ (1,000 円弱) で買うだけ。これは買い取りで何年も繰り返して使える。6 人中 5 人がこの恩恵にあずかる。通常価格は 48,000 ペソ (3,600 円強)。VISAcard で支払うと 30% の割引きとなる。

ここは 3 回目だが、ゲレンデの配置やコー

スなどはあまり憶えていない。幸い天気は真っ青な空で見晴らしはいい。整地されたコースの雪は滑り易い。周りの不整地斜面には先週降った新雪を滑った後が縦横にある。雪の状態次第では魅力的な斜面だが、雪は硬かった。整地されたコースは幅広く人も少ないので快適に自分のペースで滑れる (写真 1)。面積は 400 ヘクタールもあり広い (写真 2)。無木立で何処でも滑れるので下手すると迷子になり、ベースに戻って来られなくなる。ということで、一団となって滑った。ポールを立てて練習している外国チームもいる。

8月28日(木) 晴れ：エル・コロラドでスキー

9 時前に全員リフトの前に集合。ここはスーパーシニアのチケットがなく 65 才以上の大人は 49,000 ペソ。VISAcard で支払うと 30% 引きで 34300 ペソ。これにスキーパス 6,000 ペソを加えた 40,300 ペソ (約 6,400 円) を支払う。

今年のコロラドは以前の 2 回と比べると雪が多い。前 2 回は地肌が結構出ていて、滑れるコースは限られていたとの印象だ。今回は前の週の大雪のお陰で地肌は北側に一部出ているが、全コースが滑走可能であった。整地していない斜面には新雪を滑ったトラックが縦横にあり、一部入ってみたが雪が硬く整地したゲレンデの経験しかない女性は苦勞した。以後、基本的に整地斜面を滑った。午前中のバーンは氷気味で硬い。以前もそうだった。

午後になり雪が緩むと快適となった。ポールを立てたトレーニング・コースもある。標



写真 1. ラ・パルバ (8月27日)。誰もいない広い斜面を気持ちよく滑るメンバー!



写真 2. ラ・パルバ (8月27日)。見渡す限り、コース。広い! 何処でも自由に滑れる。

高 3339m の円錐形の山の斜面にコースが放射状に広がっていて、急なコースもあるが全体的に幅広く滑らかで滑り易い。コースとコースの間は所々隙間があるが上から下まで木の柵があり、コース間の行き来を制限して衝突を防いでいる (写真3)。ここはほとんどが T-bar で、最初慣れないので苦労した。

昼食は自前のサンドウィッチを中腹のテラスで食べた。日差しが猛烈に強く、日に焼ける。が、雄大な景色と相まって気持ちがいい (写真3)。ゲレンデ・マップがないのでナビゲイトするのが難しい。12年前はあったが、今は HP からダウンロードするのだろう。ここは隣のラ・パルバにもヴァジェ・ネヴァードにもコースとリフトが繋がっているの、注意が必要である。下手すると戻って来れなくなる。



写真3. エル・コロラド (8月28日)。中腹のテラスでランチ。背景が円錐形の山 (3339 m)。コースが放射状にある。



写真5. ヴァジェ・ネヴァード (8月29日)。スキー場の最高点 Tres Puntos 3670m を見る。この広大なエリアに誰も写っていない! ここへ行くのは T-bar lift。右へ曲がって急傾斜。雪が良ければ何処でも滑れるが、すでに硬くなっていた。

8月29日 (金) 快晴: ヴァジェ・ネヴァードでスキー

行く途中の斜面には縦横に先週の新雪を滑った跡がある (写真4)。ここは立派なスキーセンターがあり、3つのスキー場の中では一番国際色が濃い。スキー場の最上部は標高 3700m 近く (写真5)、富士山の9合目付近から滑り降りる感じだ。高度に敏感な人には影響が出る高度だ。

ここにもスーパーシニアがあり、75才以上はタダ。支払うのはスキーパスの6,000ペソだけ。まずゴンドラとリフトを乗り継いで3300mまで行く。快晴で乾燥しており気持ちがいい。日本の秋みtainな空と空気である。奥にセロ・プロモ (Co Plomo 5424m) が見える (写真6)。



写真4. ヴァジェ・ネヴァードへ行く途中の斜面 (8月29日)。前の週に降った大雪の斜面を縦横無尽に滑っている。ヘリスキーだろうか。



写真6. ヴァジェ・ネヴァードからセロ・プロモ (5424m) を見る (8月29日)。

2009年3月に登った(AACK NL67に2006年3月とあるが、これは間違い)。サンティアゴ市内から2泊3日で、最後の日は22時間行動であった。コースは滑り易い。無木立なのでどこでも滑れ、斜面には縦横無尽に新雪を滑った跡がある。もう少し早ければ、この新雪を楽しめたのに、と思わず思う(一週間前までは地肌が出ていたというが)。コースはがらがらで思うように滑れるのが嬉しい。ここからは隣のエル・コロラドが見下ろせる(写真7)。

8月30日(土) 曇/雨/霧: ファレジョーネス - サンティアゴ

今日は午前中にサンティアゴ市内に戻り、午後は郊外にあるDの家でのランチに全員招待されて行く予定だ。

8時半頃、迎えが来る。セダンに3人が乗り9時前に出発。私を含む残りの3人はGのトラックに荷物と共に乗り9時過ぎに出る。道がジグザグの下りに入る所でなんと予期せぬ通行止めに出る。今日は土曜日なので狭い山道は混む。9時から道は上りの一方通行となり、14時まで下れないという。なんたることだ! 数分差で先行の車は通過したようだ。周りには車が一台もない。地元の人は事前に知っていたようだ。警察署に行き交渉するが、ダメの一点張り。宿に戻り解除される14時まで待つしかない。

霧の中を1時半過ぎに出発したが、すでに解除を待つ車が何台も並んでいる。最後の車が上がってきて下りが動き出したのはなんと2時半過ぎ。



写真7. ヴァジェ・ネヴァードから隣のエル・コロラドを見下ろす(8月29日)。柵によって衝突を防いでいるのがよく分かる。

山を下ったら雨だ。ホテルには4時過ぎに到着。先行した3人は町に出ている。彼らが戻って来る少し前、3人の内女性1人がバッグを切られ財布を取られたとの連絡があった。帰りのタクシーで降りる時に気がついたという。多分中央市場(Mercado Central)のトイレでだろうとのこと。ここは私が来る前から治安が悪いから気を付けろと口酸っぱく言っていた場所である。その後、彼女は再び襲われた(後述)。幸いパスポートは取られなかった。バッグの2箇所が鋭利な刃物で切られていて、そこから手を入れて財布を抜き取ったようだ。全く気がつかなかったというのは相当なプロだ。一步間違えばパスポートも取られていて旅行が続けられなくなっていただろう。あるいは刺されていたかも知れない。

17:30頃、Dが夫と車2台でホテルに迎えに来てくれた。雨が結構強く降っている。彼らは新しく開発された車で30分ぐらいのサンティアゴ郊外のゲート付きのコミュニティに住んでいる。私は2018年に来たことがある。Dはチジャン・スキー場のホテルの予約でいろいろと労を取ってくれた。その他もいろいろと情報をくれて、今回の旅を大いに助けてくれた。

料理はクーラント(Curant)というチロエ島の料理で、貝類がふんだんに入っている。私以外は勿論皆初めて。ピスコラ(piscola、ブドウ酒を蒸留したのがピスコで40度ぐらい、これをコココーラで割ったもの)にチャレンジした者もいて会話が花が咲く。

D一家4人は7月末から8月にかけて一週間チジャンにスキーに行った。しかし2日間土砂降りの雨でスキー場が閉鎖し、事前に購入していた割安リフト券が2日分8枚残った。それを我々が購入した。彼らにとって無駄にならずよかった。

8月31日(日) 雨: サンティアゴ - コンセプション - ネヴァードス・デ・チジャン

今日はネヴァードス・デ・チジャンへ行くだけなのでゆっくりだ。迎えは9:10頃、空港には9:35頃到着。渋滞が無いと早い。

チェック・インの前にスキーを3台ずつの束にまとめる。Excess料金は一束USD30。計60ドル。予期せぬ驚いたことに輸送中バラバ

ラになる可能性があるからラップしろと言われる。え！日本からラップなしで運んだのに。日本円にしてそれぞれなんと6千円も取られた。チリでは担当者によって言うことが違う。

左側の窓に席を取ったが天気が悪く、アンデスは見えなかった。コンセプションまでの飛行時間は43分！あつという間だ。コンセプションには13時過ぎに到着。ミニバスで小雨が降り出した頃、2時前に出発。

チジャンの町までは高速道路で快適だ。高速から町に入る直前のサービスエリアでトイレ・ストップ。カフェテリア、土産屋が併設されている。旧市街を抜ける一般道の両側は大きな梅（櫻と思った）の並木で、歴史を物語っている。ピント（Pinto）を過ぎてから道は高度を稼いでいく。標高1200mを超えたあたりから道路脇に雪が現れ出した。雨の中気温は下がり寒くなる。

やがてスキー場のHPで馴染みとなった独特の外壁のホテル・アルト・ネヴァードス（Hotel Alto Nevados）が見えてくる。Bienvenidos（ようこそ）の看板の手前で道路の舗装が無くなり看板をくぐった駐車場は雪解けと雨で泥沼！標高は約1700m。雪を期待していたが、ここでも雨！！

夕食は一階の食堂で、係の者が注文を聞いて皿に取って行くビュッフェ形式だ。混まないうちにと開場直後の7時過ぎに行った。大人は誰もいない。小学生ぐらいの男女の学校スキー旅行グループが一緒だ。30人位いるだろうか。食事の品数は多くとても全てを試すことはできない。また、気楽にこれと頼むと、もの凄い量を盛るので他の物が食べられなくなる。頼む毎に少し少しと言って品数を増やす。ハム、ソーセージなどの肉類とチーズが豊富だ。野菜・デザートも揃っている。味は私には満足できるものだ。値段は一人45,000ペソ（7千円ぐらい）。これに（ほぼ）自動的にサービス料として10%加算したもの（合計49,500ペソ）が請求される。安くはない。

9月1日（月）晴れ：ネヴァードス・デ・チジャンでスキー

朝食は8時から。リフト券発売所が開くのは9時。ゆったりとした時間の流れである。リフト券のパウチャー（45,000ペソ）をDから買った

て持っていたのでスキーパス代6,000ペソのみを払う。名前やら何やらたくさん聞かれ、結構面倒臭かった。

雪は思ったよりも良く滑り易い。スロープは広く空いているので、気楽に好きなように滑れる。リフトはガイドブックやHPにあった通りとても遅い（写真8）。Surface liftは円盤（Disk-bar）なので乗り降りがT-barと比べて楽だ。

3000m級の活火山の斜面にあるので上の方は無木立だが、雪が少ないため石が出ているところが散見された（写真9）。ここも先々週末までは雪が無かったようだ。円錐形の火山の火口周辺は地熱で雪が無く黒々とした斜面であるが、そこ以外はどこでも滑れる。新雪斜面を滑ったトラックが散見される。

今は雪が硬くなり整地斜面を外れると曲がるのに苦労する。南米最長13kmのコースTres Mariasを話の種に滑る。日本では、ロング・コースは大抵急斜面の迂回が多いが、このコースは尾根を行くので見晴らしがいい。尾根筋なので傾斜は大体緩いが、所々急斜面があり快適にスキー場の一番下まで滑った。

日差しが強く、午後の雪は若干融けて重たくなり、腿に負担がかかるようになる。早めに切り上げ、3時頃皆で温泉へ行く。ホテルから川を渡った少し離れた所に独立してある（写真10）。サウナ、コースの仕切りが付いている温泉プール、室内温泉と野外温泉2つがある（写真11）。洗い場に相当するような施設はもちろん無い。水着で入る。湯気が立っている室内（写真12）もあるが、いずれも日本の温泉という雰囲気ではない。広いので深いところは泳げる。我々の感覚では当に温泉（温水）プールだ。

現地表現はpiscina。温泉ではなくいわゆるスイミング・プールだ。湯温は37～40℃ぐらいで、少しぬるめである。白っぽく湯ノ花が少しだが浮いている所もある。無臭。アルカリだろうか？日本のような成分の表示はない。もちろん効能書は無い。キャップをしないで室内温泉に浸かっていたら、監視人（管理人）に注意された。持っていないと言ったら貸してくれた。当にスイミング・プールである。

同じ物が出るのだろうかかと心配？したビュッフェの夕食は、メインや野菜などメニューは昨日とかなり変わっていた。ビーフステーキが



写真 8. ネバードス・デ・チジャン (9月1日)。アンデス・チジャン火山 (活火山) の山頂付近 (~3100m) の強風。



写真 9. ネバードス・デ・チジャンの主なエリア (9月1日)。右の赤い屋根の建物がホテル。谷の左側がリフトで行ける範囲。右側はキャットスキーのみ。Otto lift は長さ 2172m で最長。20分以上かかる！



写真 10. ネバードス・デ・チジャン (9月1日)。室内温泉の建物。左がサウナ。右が屋外温泉。水着、スイミング・キャップ着用。



写真 11. 屋外温泉 (9月3日)。露天風呂と表現する雰囲気ではない。シャワーが付いている。これだけ見ていたら普通のホテルのプールと同じ。泉温は 39 度。ぬるい。



写真 12. 室内温泉 (9月3日)。湯気が立っているので温泉と判る。泉温は 40 度。

あったので食べたが、やや硬く余り美味しくなかった。

9月2日 (火) 雪：ネヴァードス・デ・チジャンで停滞

朝起きたら曇りで外は寒そうに見えた。8時過ぎに雪が降り始める。上部は霧で真っ白、ホワイトアウトだ。朝食の後どうするか迷った。

上部は無木立で目印になるような物はリフトの支柱、降り場ぐらいで、ホワイトアウトでは簡単に迷う。電波がないので GPS は使えない。迷ったら遭難だ。ということで様子を見ながらずるずると停滞になった。昼頃、一階バーのラウンジに集まり、ピスコ・サワーとスナックで歓談する。結構良い気持ちになり昼飯はスキッ

プ。私とKは夕方まで昼寝。夕食前、少し広い部屋に集う。温泉に行った女性達はブラジルから来たビキニの若い女の子がたくさんいて、一番下の温泉（プール）で踊っていたと若い（比較的）Kに報告した。ワインと手製のスナックを楽しむ。これに加え女性群は自前のサンドウィッチを食べたので食堂はパス。この日食堂へ行ったのは男組だけ。

9月3日（水）快晴：ネヴァードス・デ・チジャンでスキー

朝一番乗りでスキーパスに今日のリフト代をチャージして、9時半頃滑り出す。ホテル脇で新雪は10～15cmぐらいか。雪はいい（写真13）！まずリフトを乗り継いでTres Mariasへ行く。一部整地されていない斜面があり、ゲレンデスキー専門の女性は踏んでないところを滑るのにかなり苦労した。

昼はホテル脇のオットー広場のピクニック・テーブルで女性達が日本から持ってきたカップ・ラーメンを皆で分けて食べる。旨い！日差しが強く私の顔は日焼けで赤くなり皮も剥けてきて、特に鼻が酷くなっている。

午後はここで一番長いオットーリフトに乗り、最上部まで行く。遅いので20分ぐらいかかった（休めるが）。ここからの斜面はほとんどが非整地である（写真14）。残念なことに我々が反対側のTres Mariasに行っている間の午前中に荒らされてしまっていた。山スキーヤーにとってはブラボーだが、ゲレンデスキー専門の女性は苦労する（写真15）。写真16はこのコースの下部から見下ろしたビギナーエリア。

スキーの後の温泉は気持ちがいい。一昨日と比べると混んでいる。夕食後、明日サンティアゴへ戻るなので大体の荷造りをした。過ぎてみるとあっという間のチジャンだ。3日間はやはり短い。今日は新雪が滑れて皆満足。私のチリ・スキーで新雪に当たったのは初めて。

9月4日（木）晴れ：ネヴァードス・デ・チジャン — コンセプション — サンティアゴ

ホテル発9過ぎ。空港へは12時前に着いた。距離165kmをトイレ・ストップを入れて3時間。結構遠い。



写真13. ネバードス・デ・チジャン（9月3日）。前日の新雪が積もったコース。広くて誰もいないので、皆思い思い好きなように滑った。



写真14. 新雪が積もった非整地斜面の中程からオットーリフトと上部非整地斜面を見上げる（9月3日）。



写真15. 非整地斜面で苦労する仲間（9月3日）。午前中に来ていたら新雪斜面を滑れた。



写真 16. ネバードス・デ・チジャン (9月3日)。上部からピギナーエリアを見下ろす。

例によってスキー3台を一つに束ねて、2つの Excess にする。ここではラップしろと言われぬ。さらに何かの手違いかどうか判らないが、なんと無料であった。うれしい誤算。来る時、必要がないのにラップしろと言われて余計な出費があったので、嬉しい。

夕食は羊のパタゴニア風焼肉 (Cordero Asado) の店 Meson de la Patagonia を D に予約して貰い行った。チリの食事の量は多いので、Cordero Asado と牛ステーキ、豚のステーキを2人前ずつ注文して、それぞれを3人で分けた。コルデロの量がとても多く、3人でも食べきれなかった。旨い。牛は思っていた程美味しくはなかった。行きはホテルで、帰りは店でタクシーを呼ぶように頼んだところ、いずれもそのようなサービスはしていない、店を出たところで拾え、Uber Taxi を自分で呼べと言われた。一同エ?!

9月5日(金) 快晴：サンティアゴ市内観光

ホテルの最寄りのメトロの駅でメトロカード (Suica と同じ) と6人分の切符を買う (チャージする)。G によると今のサンティアゴは移動手段としてメトロが一番安全だという。有数の展望観光スポット、セロ・サンタ・ルシアへ行く。この時間 (10時頃) はまだ空いている。スモッグが濃いですが市内の景色を堪能する。

次にサンティアゴの大きな道路を渡って定番の土産屋街サンタ・ルシア工芸店街に行く。賑わっているが昔ほどではない。

昼飯は中央市場の Donde Augusto へ行く。

ここは危険地帯なので近寄るなどと言われていたが、やはりサンティアゴ観光で訪れたいスポットの一つなので、注意すればいいだろうということで行った。

驚いたことに、昼過ぎなのにマーケットの中はガラガラ、店もガラガラ! 昔を知っている人間には信じられない光景だ。サンティアゴ在住の友人からこの付近は外国人の犯罪が多くなり、チリ人は寄りつかなくなったと聞いていた。本当だ! ここのトイレで女性は財布を取られたのだらうという。私の40年に渡るドンデ・アウグスト通いでこんなに閑散としているのは見たことがなく、複雑な思いであった。

食事を堪能してマーケットの外に出た時、私はここはサンティアゴで一番危険な場所だから気を付けるよう、改めて警告した。雑踏の中をメトロの駅の方に歩き出した。

事件は混雑している道路脇からメトロへの階段の降り口へ曲がったところで起きた。中間の女性の一人がショルダーバッグをひったくられそうなり仰向けにひっくり返った。幸い、女性は無傷だった。バッグは袈裟懸けにして上着を羽織っていたので取られなかった。昼間の衆目の雑踏の中での出来事である。周りの人達で気に止める者はいなかった。走って逃げる犯人をつかまえようとする者もいなかった。しょっちゅう起きていたので、またか、という反応なのだろうか。ほとんど同じ場所 (同じ地域) で一週間に2回も被害に遭うとは!

昔からこの地域は治安が悪かったが、友人の話ではピニエラ政権の2010年代半ばから南米他の国からの移民が増えてこの地域に多くたむろ (住む?) するようになり、ここ数年治安が特に悪くなっているという。ダウン・タウンは全く様変わりしてしまったようだ。午後はDの案内で郊外にある高級工芸村 Centro Artesanal Los Dominicos へ行った。

明日からは別行動だ。私はコジャイケ旅行の準備をする。他の者はイースター島へ2泊3日で行く。私はすでに2回行っているのだから今回はパス。代わりにパタゴニア北氷原の玄関コジャイケへ行くことにした。

コジャイケにはチリ国立図書館分館のアイセン州地域図書館がある。ここに、退職して間もない2018年に、30年以上にわたるパタゴニア氷河の調査で集めた空中写真や地形図など貴重

な資料と調査で得たデータ並びにその成果に加え、パタゴニア氷原に関する図書（古本市場で2000ドルの本を含む）も寄贈した。世界中の研究者がアクセスできる。

その後、21回に渡る北氷原の空撮写真のデジタル・スライド約16,000枚を寄贈した。そして今回、現地の仲介者Oが、23回に渡るパタゴニア現地調査のデジタル・スライド約16,000枚を同図書館に寄贈するセレモニーをアレンジしてくれた。これに加えて、1984年から2018年まで氷河空撮のパイロットだったロベルト・レオンと奥さんのクーキに会うのが目的だ。

夜、Dからイースター島観光に関して重要な情報が入った。サンティアゴ空港でイースター島行きの便に乗る前、入島申請をしなければならぬという。イースター島に行く連中は誰一人としてこの情報を把握していなかったため、緊急に申請書類を作るよう連絡した。

9月6日（土）霧、晴れ：サンティアゴーコジャイケ

イースター島へ行く連中は飛行機の時間が早いので朝早く5時過ぎから動き出したが、私は遅いのでのんびりした。離陸は1時前。天気が良かったのでアンデスの山々が見えた。

バルマセーダ着陸はコジャイケ時間16:43（サンティアゴ時間15:43 今日から夏時間変わった）。空港施設が更に新しくなっている。レオン一家が出迎えてくれる。コジャイケの彼らの家に着いて驚いた。なんと1980年代に住んでいた昔の家である。懐かしく我が家に戻ったような感覚だった！ロベルトがリタイア？した時、サンティアゴに戻るつもりでこの家を売りアパートへ引っ越していた。しかし、友人の多いコジャイケに留まることにして2021年に買い戻して2022年に引っ越したとのこと。やはり人間関係が人生を決める。

9月7日（日）快晴：友人宅でBBQ

今日は午後からOの家でバーベキューなので、朝食の後、町の変化（2018年以來）を見に散歩に出る。結構いろいろと変わっていたが、一番驚いたのはトレッカー・観光客の溜まり

場だったCafe Ricerが無くなっていたことだ。この店は最初のGRPP1983（パタゴニア氷河調査隊）の時、メンバーの情報交換のための溜まり場にしていた。コロナで潰れたのだろうか。

Oの家は町から少し離れた小高い丘の上にはぼつんとある。彼の家からの見晴らしは抜群だ。360度。初めて訪れた。ここからはセロ・ディヴィサデーロにあるスキー場セロ・フライレが目の前だ。世界最南端のプンタ・アレーナスのスキー場に次ぐ緯度にある。冬の氷河調査の帰りにレンタルスキーで滑ったことが2回ある。今年は雪が少なくオープンしなかったという。ここでも地球温暖化の影響か？風が少しあったが晴れていて気持ちがいい。コンドルがたくさん飛んでいる。地元の新鮮な食材で舌鼓を打つ。

9月8日（月）曇り、晴れ：コジャイケーサンティアゴ

Oのピックアップで寄贈セレモニーが開かれる郊外の博物館へ行く。9時過ぎに国立図書館アイセン州分館長のグローリアと博物館の館長のグスタヴォに会う。ここの地下の収蔵庫に私が寄贈した北パタゴニア氷原の空中写真が収められている。セレモニーは簡単で、スライドを収めたUSBと寄贈する旨の書類をグローリアに渡し写真を撮った（写真17）。レオン一家に別れを告げ、Oがバルマセーダへ送ってくれる前に図書館にちょっと寄った。ここには私が寄贈した本や論文の抜き刷り等の展示がある。

バルマセーダからサンティアゴまではほとんど曇り、着陸の少し前に雲が取れ、アンデスの一部が見えたのみ。アンデスは何度見ても見飽きない。サンティアゴ着陸は17時でスケジュールより30分も早く着いた。

イースター島の連中は夜10時過ぎに戻ってきた。Kの短い話では、モアイの観光は、今は国立公園なので入園料を払い（80USドル）ガイドを付けないとできないようになっていたという。それで2日目は一般ツアーに参加したとのこと。帰る日の午前には日本人のガイドを頼んだという。従って自前で観光する予定だったレンタカーはほとんど使わなかったとのことだ。入島申請とか島内観光の制限という重要な情報は日本にほとんど入っていないそうだ。それで、最も重要な情報2つを全員が見落としていた。

帰路

9日：ホテルの食堂で朝食を済ましてから空港へ行く。Gがトラックにスキーを積んで、もう一台の車と共にホテルに迎えに来る。本当に助かる。空港着10時過ぎ。例によってスキー3台を一つにまとめる。一つ150USドル（約2万3千円）取られた。Kはブラジルに観光に行くので帰りは5人。彼のスキーは我々が運ぶ。

免税店で土産にモアイ像の入れ物に入ったピスコを買った。が、後でピスコはオーストラリアに持ち込めない、禁止されていて税関検査で没収されるとの情報が入った。それで返金のため店まで慌てて走った。

搭乗ゲートを過ぎたら乗客が滞留している。なんのこともを思ったら、機内持ち込み荷物を全て手で検査している。昔アメリカ便でやっていた。オーストラリア便でやるとは全く予期していなかったのが驚いた。

シドニー non-stop 便 QF28。昔2015年に飛んだ時、non-stop 便はなくオークランドで給油し18時間かった。今は15時間弱だ。

シドニー着陸10日の午後4時半過ぎ。霧、雨、16℃。入国審査は問題なし。ホテルに一泊なのでスーツケースとスキーは一時預かりに預け、Airport Linkで行く。翌11日は午後3時までRocksやHaymarketなど観光して空港へ。チェック・インでスキーの束（3台）を excess で登録したら一つについてAUD120（約1万2

千円）取られた。来る前にカンタス航空HPで調べたらスキー等スポーツ用品はタダとあったが。Latamに限らず Excess 荷物の情報が錯綜している。羽田到着は12日の早朝5:25。定刻通り！スキーの束をバラし、各自宅急便で送る手配をした後、ばらばらと解散。

12年振りのチリ・スキー、直前に大雪が降り救われた。チリまで行って雪が無かったら悲惨だっただろう。最近のアンデスの気候も不順らしく、7月末に大雨が降った。その直後一晩で1m近く積もった大雪！雪と天気、全く時の運のようだ。



写真 17. コジャイケのアイセン州博物館での贈呈式(9月8日)。国立図書館アイセン州分館の館長グローリアに約16,000枚のパタゴニア氷河調査のスライドが入ったUSBを贈呈した。

図書紹介

『民族植物学入門—アンデスからヒマラヤへ』

山本紀夫編著

京都大学学術出版会 2025年12月発行 菊上製・452頁

ISBN : 9784814006236 本体 : 7,200円 (税込 7,920円)

斎藤清明

国立民族学博物館を停年後もさかんに執筆を続けている山本紀夫さんが、82歳をすぎてまた大著をものにした。編著とあるが、大半を執

筆。長年にわたるフィールドワークをもとに、中央アンデスとネパール・ヒマラヤの農耕文化を取り上げて人間と植物との関わりを追求し、



高地文明という視点を提唱している。

京大探検部員だった山本さんは1968年、農学部4回生のときにアンデスの栽培植物の調査に出かけた。それ以来のフィールドワークは50回を超え、現地での滞在も13年間余りになる。農学での博士論文の後、民族学に転じ、「民族植物学」に打ち込んできた。ネパール・ヒマラヤでも1991年から調査をおこなっている。

本書の前半は第1部「民族植物学からみたアンデス世界」。その多様な自然環境はじめ、知られざる家畜や栽培植物を紹介。ジャガイモについて、もとは雑草のような野生種から栽培種になってきた「ジャガイモの誕生」を描いている。また、昔からの食糧源を、土器に描かれている図像で示し、わかりやすい。インカ帝国やそれ以前の農耕文化についてもくわしく触れ、毒抜きから食糧貯蔵にいたる食品加工技術も取り上げている。そのうえで、中央アンデス南部高地を根栽農耕（イモ類）文化圏としてとらえていく。

根栽農耕は東南アジアなど熱帯低地が中心地

だ（中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』）が、アンデスという熱帯高地でも、寒冷高地な環境に人々が適応するために技術的、社会的に発達させてきたという中央アンデス根栽農耕文化論である。

また、アメリカ大陸の古代文明は穀物のトウモロコシ農耕が基盤で、アンデス文明についても同様にいわれているが、山本さんはジャガイモの重要性をかねてから唱えてきた。今回、いっそう説得力のある主張をおこなっている。それとともに、今日のインカの末裔たちの暮らしについて触れることも忘れていない。

後半の第2部「民族植物学からみたヒマラヤ世界」は、登山家でもある山本さんがネパール・ヒマラヤを、社会学や地理学、植物学などの専門家と学際的なチームを組んで調査した成果が、共同執筆として盛られている。「ネパール・ヒマラヤの多様な植生—亜熱帯林から高山草地まで」、「作物と家畜と森林と—シェルパ族の生業」、「エベレストの山麓で有毒イモを食べる—半栽培植物の利用」、「シェルパ社会の食卓革命」などと。

最後に、「民族植物学から高地文明の生態史観へ—アンデスからヒマラヤへ、そしてチベットへ」で総括する。チベット文明を取り上げ、同じ高地のヒマラヤでは文明にならなかった理由にも触れる。そのうえで、「なぜ中央アンデス高地で文明が誕生したのか」に迫り、そのためにも民族植物学が重要だと説く。

本書は、山本さん自らの調査・研究をたどりつつ、「入門」とうたったのは、一般読者にも理解してもらおうとの願いからだという。小生は山本さんと農学部（農林生物学科）で同期だった（最初の調査から帰国したばかりの彼に下宿を譲って私も南太平洋へ貨物船で出かけたこともあるが、毎年のように南米に出かける彼をすごいとおもったものだ）。いま、高齢になっても旺盛な執筆活動は、今西さんや梅棹さんをほうふつさせてくれる。うれしいことだ。

北大・京大交流会（続）

京大山岳部とのご縁

小泉章夫（1974年 AACH 入部）

昨年夏、北大の仲間と笹ヶ峰ヒュッテに泊まり、京大の皆さんと飲んで食べ、山の歌を歌い、歓談させていただいた。榊原さんによれば「京大と北大は同じにおいがする」のだそうだ。たとえ山行を共にしたことがなくても、山岳部の先輩と後輩の間には、人生の一時期に同じ経験を共有したことによる親近感・一体感があるように思う。それが京大と北大の間に感じられるのは、同じようなスタイルで登山をしてきたからなのだろう。

京都で生まれ育ち、洛北高校の山岳部から北大山岳部に入った。多分、4年目のころ、京大山岳部から北大のルームに問い合わせがあったのだと思う。京都に帰省した折に、実家のママチャリを借りて、熊野寮に京大山岳部の人たちを訪ねた。何の話だったのか、思い出せないが、深夜まで山談義で盛り上がり、間違えて寮の住人のつっかけを履いて、帰ってしまった。多分1981年に、幸島さんが札幌に来られたときには、お化け屋敷で飲食して、ヘルヴェチアヒュッテにご一緒したように思う。

笹ヶ峰ヒュッテの2日目は、幸島さんの案内で、北大の八木キンペイと、ブナの森を抜けて火打山を目指した。途中、オバサンたちにも追い越されて、高谷の池で断念して引き返した。午後はヒュッテ2階の広いデッキから高原の借景を眺めて過ごし、3日目に山岸さんに駅まで乗せてもらい、札幌に帰った。

お土産に「ヒマラヤへの道」を頂戴し、お返しに「北山の会」（京一中・鴨沂・洛北山岳部

同窓会）にあった「京大山岳部時報1950」を杉山さんに送った。京一中山岳部の創立部員の加納一郎は北大予科へ、4年後輩の今西錦司、西堀栄三郎は三高から京大、藤江永次は北大予科へ進むなど、京大と北大は山行きのはじまりでつながっている。

現在、北山の会では、初代笹ヶ峰ヒュッテや北大のヘルヴェチアヒュッテと同じ頃に建てられた山小屋「北山荘」の百年記念誌をつくらうと準備している。参考資料を探して、竹田さんに三高山岳部ルーム日記を閲覧させていただいた。斎藤清明さんの今西錦司に関する著作も読んだ。

初代の北山荘は西堀さんたちが大阪美津濃からもらって直谷上流に移築した小屋。当初は京大旅行部が所有していたが、利用していたのは、もっぱら三高や京都一中の部員たちだった。戦中の1942年に一中が建て直している。

ところで、「ヒマラヤへの道」を読んで、面白い発見があった。僕の曾祖父の一人は田中喜左衛門という。京都で味噌屋？を営んでいたが、早くに隠居して山道楽に入れ込み、単杖のスキー山行や三高山岳部の若者たちと登山をしていた人らしい。その名前が「ヒマラヤへの道」の戦前史に何回か出てきて、AACKの創立時からの会員であったことを知った。

京大と北大が同じ頃に山小屋を建てていた共時性、山岳部のつながり、個人的なつながり、数十年の時を経て、動き出したご縁を大切に、次代の若者に引き継げれば楽しいことだ。

AACK との出会い

白石和行（1967年 AACH 入部）

AACK という呼称を最初に知ったのはたぶん中学3年か高校1年のころ、岩波新書の西堀越冬記を読んだときだったか。南極観測船「ふじ」の建造が進んで、南極観測再開の話題がニュースに頻出するようになったころだった。北大山岳部に入ってルームの図書で、AACKの錚々たる先達たちの著書やAACKの海外登山、学術調査の報告書に触れるようになった。そういえば、学部2年目のときの1月に、京都から岩坪五郎夫妻と樋口明生夫妻がヘルヴェチアヒュッテを訪れた時、キッチンボーイとしてお世話したことがあった。

南極観測が始まったとき、小学生だった私はいつの日にか南極に行きたいと思っていたが、卒業論文のフィールドである日高山脈に出かける直前に、山岳部の先輩でもある指導教官のジミーこと木崎甲子郎さんから「お前、南極に行くか？」と訊かれ即座に「はい」と答えて、南極行の切符を手にいれた。

加えてもらったのは、低温研の成瀬廉二さんが率いることになっていた第14次越冬隊（1972-74）の内陸旅行チームのメンバーだった。わたしの役割は「設営一般」、主に野外観測のサポートだったが、同じチームに、雪氷担当の横山宏太郎さんがいた。彼とは京大と北大での山岳部の入部年が同じだった。準備期間も含めて2年近くを宏太郎さんと共に過ごして、すっかり意気投合してしまった。帰国後も親交を深めて、お互いに札幌と京都を行き来しているうちに周りの悪友たちも一緒に遊ぶようになった。

そのころ、AACHの渡邊興亜さん、伏見碩二さん、名越昭男さんらとともに、名古屋の樋口敬二研究室のグループにもAACK出身者が

多数いることがわかり、人脈の豊富さに圧倒される思いだった。

1976年から自分のフィールドをネパールヒマラヤに求め、カトマンズで転がり込んだのが、樋口研のGEN（ネパールの氷河研究グループ）の根城であった。なかなか発行されないトレッキング許可証を待つ間に、ずるずると滞在が長引き頻繁に出入りするGENのメンバーの中にはもちろんAACKのメンバーがいた。また、カトマンズで一緒に過ごした和田チョーハ（一雄）さん（AACH、霊長研）が1980年ころ主宰していた「ヒマラヤを語る会」にもAACKの若い会員が加わっていた。

南極OBも含め、付き合いの濃淡はあるけれど、多くのAACKの皆さんと知り合いになり刺激をもらえたことは、私にとって幸運なことだ。

笹ヶ峰ヒュッテには、以前から宏太郎さんに連れていってくれるように頼んでいたことだが、2025年夏に実現して、多士済々のAACK会員の皆さんと、楽しく交歓できた。その時にあらためて、AACKとAACHの親和性に気づかされた。

アカデミック・アルパイン・クラブという似通った名前をもつこの二つの団体の命名の由来については、今回、八木キンペー君が書いてくれたので、疑問は解けた。昨今の現役部員の減少の中で、AACKとAACHが連携することで、明るい未来が開けそうな予感がする。若者世代に期待しよう。

迎え入れてくださった、AACKの皆さん、ありがとうございました。

(2026.2.7)

念願の笹ヶ峰ヒュッテを訪れて

浜名純（1967年 AACH 入部）

ベランダの椅子に腰かけ、冷えたビールをぐいと喉に流し込む。眼前には、ゆるやかな牧草地が広がり、夏草が涼風にかすかに波打っている。ここは京都大学笹ヶ峰ヒュッテ。妙高山や火打山、黒姫山に囲まれた標高 1,300 メートルの高原は、都心の灼熱がうそのようにさわやかである。

私がこのヒュッテにやって来たのは、幸島司郎さんが前号（114号）で書いているように、大学山岳部が抱える数々の課題を乗り越えるため、組織を超えた交流を深めようという趣旨で開かれた第1回京大・北大交流会に出席するためである。そのために私は改めて資料を読み込み整理し、万全を期して臨んだ。京大の方々も課題を深彫りし精査してくるに違いない。それにきちんと誠実に応えねばならないと思ったのである。（上記表現は嘘です。そんな気持ちがあるはずもないのはバレバレです＝笑い。榊原雅晴さんが前号で記している如く、飲んで食べ、談笑し歌って大いに盛り上がり、素晴らしいひと時をすごさせていただきました）

周囲の山々を眺めながら、「そうか、50年前に笹ヶ峰ヒュッテに来ることができたかもしれない。ひょっとしたら AACK の会員として、何度も訪れていたかもしれない」という思いが私の脳裏に浮かんだ。榊原さんが、前号で書いているのでちょっと補足させていただく。

今からおよそ 50 年前のことだ。農学部を卒業した私は、札幌の繁華街ススキノで餃子屋になった。酔客やホステス相手に餃子を焼いて提供するの楽しかったが、2年ほどして柄にもなく「学問」などに触れてみたくなり、京大の霊長類研究の大学院を受けることにした。試験日より早めに京都入りし、万全の準備と最後の仕上げをして試験に備える計画を立てた。そこで、横山宏太郎（以下コータロー）さんの銀閣寺の土蔵の下宿に転がり込んだ。コータローさんとは、白石（AACH）を通しての知り合いだった。二人は一緒に南極で越冬し、帰国後、コータローさんが札幌を訪れた際には、私ともよく飲むようになった。そんな間柄である。

しかし、コータローさんの下宿に寝泊まりしたのがいけなかった。連日のごとくコータローさんに飲まされ勉強などまったくできない状態となった。結果はもちろん不合格。「コータローの下宿を選んだのがそもそもの間違いだった。コータローのあほ～」と悔恨の思いで札幌に帰った。もしあの時、「コータローさんの下宿」ではなく、京都の宿屋などに泊まっていたら、私は AACK の会員になり、すでに 50 年前に笹ヶ峰ヒュッテを訪れていたかもしれないのである。

閑話休題。笹ヶ峰ヒュッテでは昔から名前を存じ上げ身近に感じていたが、実は会ったことがなかった人たちに実際に対面できたこともとてもうれしかった。例えば、斎藤清明さん。コータローさんのおかげで（せいで）、一敗地にまみれた私は、札幌に戻り餃子屋を辞めた。妻の大学院の奨学金と私自身の塾の先生などのアルバイトで糊口をしのいでいたが、ある日、妻が「大学の掲示板に毎日新聞記者募集の貼り紙が出ていた」というので、試験を受けたら入ってしまった。そのことを京大から北大の低温科学研究所に来ていた中尾正義さん（AACK）に話したら、「仲間に斎藤清明という毎日新聞の記者がいる。一度会ったらいいよ」と言ってくれた。ぜひお会いしたいと思いながら半世紀が経過し、今回初めてお会いすることができたのである。

幸島司郎さんのことは、樋口和生（AACH）からよく話を聞いていたが、今回やはり初めて対面できた。また、山岸久雄さんは南極 OB 会の会計を担当しており、その南極 OB 会の事務局は、東京・神田の私の事務所に同居している。しかし、事務所ではすれ違いで会ったことはなく、なんと笹ヶ峰ヒュッテが初対面だった。

最後に

京大のみなさんが何から何までお膳立てしてくれました。食事の支度から後片付けまですべてをやっていただき、我々はお殿様のように座っていればいいというという状態でした。た

ただ感謝する次第です。

今回は、ぜひ北大山岳部の山小屋「ヘルヴェ

チアヒュッテ」か「空沼小屋」で交流しましょう。お待ちしております。

旧友との邂逅－ AACK と AACH

八木欣平（1974 年 AACH 入部）

笹ヶ峰へのお招きありがとうございました。去年の7月に幸島さんと一緒に北海道の天塩川をカヌーで下る機会もあり、お会いできるのも楽しみだったので、今回の交流会に参加させてもらいました。素晴らしいヒュッテンレーベン、お陰様でとても楽しい時間を持たせていただきました。

京大山岳部と北大山岳部“同じ匂いがする”と宴席でも誰かがお話されていたかと思えます。なんか親しかった古い友人と偶然道端で出会って“じゃあ 飲みに行こうか？”と馴染みのお店で盛り上がっているような雰囲気でした。参加させてもらって本当によかったです。

さて、よい機会と思い、この場を借りて最近調べた北大山岳部の英語名称のことについてご紹介させていただきます。北大山岳部は Academic Alpine Club of Hokkaido (AACH) が、創立当時（創立当時名称には of は無し）から用いられています。国内の大学山岳部の英語名称としては他では見られない珍しいものですが、京都大学山岳部の OB を中心につくられた京都大学学士山岳会でも、Academic Alpine Club of Kyoto (AACK) という名称を使用されています。この名前の由来と AACH と AACK の関連性について過去の資料をたずねてみることにしました。

AACK の由来については、皆さんご存知かと思えます。幸島さんから送っていただいた AACK Newsletter (No.107,108 2024 年 3 月) には、「AACK の創立メンバーである高橋健治さんが、AACK 創立（1931 年）当時 AACZ（チューリッヒ）と強いつながりを持っておられたようで、その縁で AACZ にあやかって新しく設立する山岳会を AACK と名付けたのかもしれない。」と事務局だよりに記されていました。また、AACK50 年史『ヒマラヤへの道』（1988）で、「A.A.C.（アカデミッシェル・アルペン・クラブ）という名称は、スイスのベルン

やチューリッヒなどで使われていた。（中略）優秀な人材を抱えて活躍しているのを、今西らはアルパイン・ジャーナルなどで知っており、そのようなクラブを作りたいと考えた」とありました。更にこの本では昭和 12 年度（1937 年）の会則第一条に「本クラブハアカデミッシェルアルペンクラブキョウト（A.A.C.KYOTO）、ト称ス。」という記載も見つけることができました。

一方 AACH については、英語名称をなにかで規定されているということはありませんでした。過去の山の会の会報の記述をたどると北大山の会會報第 30 号昭和 35 年（1960 年 11 月発行）の「グブラーさんのことども」という渡辺千尚 OB のコラムで「山岳部の呼称で A.A.C.H. (Academic Alpine Club Hokkaido) の選定は同氏の助言によるものである。」とあり、詳細な年代については言及されていませんが、山岳部の 1926 年創立時に提案されたと推測されました。明確に記録が残っているものとして、「北大山岳部文武会山岳部記録 1.1926.11.10～1931」を見つけました。そのノートの 49 頁、昭和 2 年（1927 年）5 月 3 日の新入部員の歓迎会の記録のあとに和辻廣樹 OB のデザインの部員章のスケッチが載せられていました。このノートの数頁あとに「エーデルワイスにザイルをまきそのザイルの上に AACH (Academic alpine club Hokkaido) なる字を入れた。」とあり、少なくとも 1927 年にはこの英語名称が用いられていることがわかりました。

アーノルド・グブラーさんは 1925-1932 年の間ドイツ語教師として北大に勤められ、北大山岳部創立時の部員と親交があり、現在も使っているヘルヴェチアヒュッテという山小屋を作った主要な方のおひとりです。彼はスイス山岳会 Schweizer Alpen-Club に所属しており、その頃の AACZ のようなスイスの大学関連の山岳会のいくつかが AAC- の名称を使ってい

たことから、その名称を薦められたと思われ
ます。

日本の他の山岳部にはほとんどみられない
Academic という名前は、別のルートではあり
ますが、ともにスイスの大学山岳会に由来す
るものでした。ただ、その Academic という言葉
で表現されるもの、AACK と AACH は組織の
形態も異なり、その方向性も全く同じとは言
えないかもしれません。それでも単に高さや困難
だけではない“未知への好奇心”のようなもの
がこの言葉に込められている気がしました。同
じ匂いを感じたのはそのせいかもしれません。
心地よい時間をありがとうございました。

追記1 AACK Newsletter (No.107,108 2024
年3月)の事務局だよりにAACHの由来につ
いての問いのコメントがありましたが、この拙
文で回答になるかと思っています。

追記2 幸島さんとはほぼ50年ぶりの再会
でした。50年前最初にお会いしたとき、幸島
さんご自身の研究のための来道で、僕は獣医学
部の研究生でした。あの時僕が、ライオンの肉
を調達してきたとお話されておられましたが、
僕には“ライオンの解剖検査”を行った記憶
がありません。ただ、仕事柄から、色々と検査
はしていました。“ライオンの肉”については
都市伝説ということでご了解ください。

AACH に感謝

横山宏太郎

私は1967年に京大山岳部に入った。AACH
の白石和行さん*、浜名純さん*と同期入部
である。

京大山岳部(KUAC)では合宿は少なめで分
散山行が基本だった。行きたい山を見つけ、日
程を考え、仲間を募って計画を作りあげていく。
その過程で、過去の登山記録の調査は欠かせ
ない大事な作業だった。KUAC 報告や山岳雑誌
など部室にある書物で記録を探していく。北
海道の山を対象にするときは、何といても北
大山岳部(AACH)の部報が頼りだった。私にと
ってAACHとの初めての接点だった。北海道
の山を何度か計画したが、札幌のルームを
尋ねたりはしなかった。

ヒマラヤのため、上田豊さんらの真似を
して「氷河研究」「雪氷研究」に進むことに
した。現役の終わり近く、氷河研究をめざ
すグループが動き出していた。名古屋大の
樋口敬二先生(三高山岳部OB)に京都から
は中島暢太郎、樋口明生両先生。京都の
学生では井上治郎さん(3学年上)がか
しらだった。そこへ最下級生で加わった。
樋口研究室に初めて行ったときに「サ
ロン」と称された大部屋で、テーブルに
足を上げてペンチで電線の被覆を剥いて
いる人が迎えてくれた。年上だがなん
となく親しみやすそうです。こし安
心した。それは名越昭男さん*だ
った。思えばこれがAACHメンバー
との最初の

遭遇だった。グループには渡辺興重
さん*、伏見碩二さん*がおられた。

大学院に進むつもりでいたが、たい
して勉強もせずそれでも京大なら合
格するだろうとのんびり構えていた。
真に受けたわけではないが、試験
会場を出ると合格者名簿が貼ってあ
った、などという話をする先生も
いた頃である。

1971年夏のはじめころか、渡辺
さんから電話があった。宇治の防
災研究所の井上さんが居た部屋
で受けたと思う。用件は、「来年
南極へ行くか?」だった。願っ
てもないチャンス、と喜んだ。
翌年に出発する第14次隊の雪
氷分野では内陸調査の計画があ
り、氷床の流動を求める測量
が大きな仕事という。私は学
部では地球物理学教室の測地
の研究室にいたので、測量が
できるからの打診となったの
かもしれない。このおかげ
で、大学院も合格できた。面
接で「君は氷河の研究をしたい
そうだが、日本に氷河はない
(当時の認識)、どうするの
かね」との質問に、待って
ましたとばかり「合格でき
れば南極に行けることにな
っています」と答えた。拾
ってくれた質問の主が指導
教官となる先生だった。

白石さんと初めて会ったのは、乗
鞍での観測隊隊員候補者の
訓練合宿の時だったろう。
すぐに意気投合したのは「
同じニオイ」の故か。偶

然の出会いだが私にはほんとうに幸運なことだった。

大学院は休学して1972年6月から文部省に雇ってもらい(文部技官)、東京・板橋の極地研究センター(のちの国立極地研究所)に準備のため詰めることになった。そうすると住所が京都では通勤圏内とはいえないのでマズイといわれ、白石さんの実家に名目だけ下宿させてもらった。南極ではもちろんだが、このように、当初から白石さんには様々に世話になっている。

14次隊では昭和基地でも内陸でも二人でよろず雑用引き受け係だった。内陸旅行では、白石さんは装備を、私は食料を主に担当した。南極での行動には極地ならではの危険が伴うのだが、隊員のなかの登山経験を持つものが中心に対応していた。南極観測の初期に比べるとその数がしだいに少なくなってきていた当時、14次隊では、白石さんと私が中心だった。一緒に行動していて全面的に信頼できる人がいるのはなんとありがたいことであったか、といま振り返って思う。

楽しい一年間の越冬は終わり帰国して、観測データの整理に雪氷分野主任の成瀬廉二さん(北大ワンダーフォーゲル部OB)のおられた北大低温研へいった。そのときは矢野実さん*の下宿に居候の白石さんに居候という状態になった。必然的に同級生の皆さんと会う機会があり、そこから付き合いが広がった。特に浜名さんとは、ご本人が仰るように付き合いが深まった。

ネパール・カトマンズに活動の基地となる建物を持つ、というカトマンズクラブ(AACH会員が中心)に誘われて加わった。1977年秋、ランタンリ偵察のためネパールへ行き、出来立てのカトマンズクラブハウスを利用した。単独で地質調査に来ていた白石さんと一緒になり、室内の整備などを手伝った。山田知充さん*が一家で隣の家に住んでおられたのはこの時だったろうか。

1980年秋、木崎甲子郎隊長*のヒマラヤ地殻変動調査隊に測量屋として加わりネパールに行った。多士済々の隊員を包み込むような隊長の人柄もあって、楽しい隊だった。カトマンズクラブハウスではAACHの冬期バルンツェ隊と同宿になり、楽しいカトマンズ暮らしができ

た。

1982年から西宮市にある武庫川女子大学で教員を務めた。担当は被服気候学、人間をとりまく様々な環境に対しどんな服装が適しているかを考える。登山や極地の衣類装備もその線上にある。人間-熱環境系シンポジウムという会合では、冬期ダウラギリ隊の報告でお名前を見ていた西安信さん*にお会いできた。西さんは建築、私は被服で、いずれも人間と環境の間にある調節機構というわけである。私は短期間で雪氷分野に戻ってしまったので、いろいろ教わる機会なく残念だった。

雪氷分野に戻ってから南極の深層掘削計画に関わった。AACHからも何人も関わっていた。物資輸送と基地建設の第35次隊(1993年出発)は渡辺さんが総隊長・夏隊長、私が越冬隊長だった。ドームふじの基地をほぼ完成して迎えた第36次のドーム隊は、リーダー東信彦さん*のもと、ドームふじ初越冬と深層掘削開始の大役を果たした。

そういえば、樋口和生さん*が最初に南極観測隊に参加するとき、外部委員として面接をしたことを思い出した。たぶん白石さんからの依頼だっただろう。

北大のヒマラヤ地域での活動記録ともいえる「テーチス海に漂う青い雲」の出版に誘われて、ほんの少し書いただけだが著者の一人に加えてもらった。著者のなかにはお会いしたことがない先生方の一方でカトマンズ暮らしを共にした方もある。久しぶりで分厚い「テーチス海」を開いて読み始めると止まらず、この原稿が進まない。貴重な機会をいただいたものである。最近、浜名さんに誘われて「チベット紀行」にも少しだけ書かせてもらった。

これまでたくさんの場面で、AACHのひとたちのおかげで楽しいことや貴重な経験ができた。たいへんありがたいことだった。私も少しはお手伝いしたこともあるが、そのベースには、「同じニオイのする人たち」という感覚があったのだろう。このところはほとんどスキーなど遊びの付き合いになっているが、その一つとして白石さん・浜名さんを笹ヶ峰ヒュッテへ誘ったことが発端で今回の交流会となった。おかげ

さまで楽しい交流会となり、それがまた次につながるようで楽しみである。そのような関係がさらに発展していくことを願っている。ともかく、AACHには感謝するばかりである。

注： *はAACH会員

<参考>

テーチス海に漂う青い雲 テーチス紀行集編集委員会・編 570ページ 2011年 いりす
チベット紀行 北大山の会チベット調査隊・編著
240ページ 2025年 いりす

お詫びと訂正

お手元にお届けした Newsletter の 113 号と 114 号に誤りがありました。たいへん申し訳ありませんでした。お詫びして以下の通り訂正いたします。

なお、web 掲載版では、公開から 2、3 日以内に修正済みです。PDF をダウンロードされた方はお手数をおかけしますが確認をお願いします。

113 号

24 ページ左、写真 2 の説明の 2 行目
誤「右から」→正「左から」

114 号

7 ページ左、本文の 3 行目
誤「シスパーレ」→正「シアピーク」

以上
編集人 横山宏太郎

事務局だより

冷え込みが厳しい 1 月 24 日土曜日、雪をまとった比良山系がくっきりと見渡せる琵琶湖のほとりのフィガロホールという小さいけれども整ったホールで、「笹ヶ峰メモリアルコンサート」と名付けたコンサートを開催しました。

コンサート開催の経緯を話すと長くなります。ほぼ 20 年前のこと、笹ヶ峰京大ヒュッテが竣工し落ち着き始めたころ、この笹ヶ峰の素晴らしい環境でプロの音楽家に来ていただいてコンサートができないかという話が持ち上がり、会員、故原剛さんご夫婦、故笹谷哲也さん、それに原田道雄さんが発起人となり、笹ヶ峰音楽祭というものを開催する運びとなりました。それ以降、この音楽祭は毎年初夏に京大ヒュッテで開催し十数年間続くこととなります。仙台フィルのコンサートマスターの方、欧州帰りの

新進気鋭の音楽家の方々、時には会員田中二郎さんご息女のご縁のロックバンドやニュースステーションのテーマ曲の作曲家などに来演いただき、山岳部 OB 有志、周辺の大学の山小屋の関係者、その他、山仲間の方々が集い、昼は鳥のさえずりを聴きつつ音楽を楽しみ、夜は星空の下でバーベキューを囲んでお酒と会話を楽しみ、下界の煩わしさを忘れるひと時を満喫していました。しかしながら、コロナ騒動が起り、原さんご夫婦、笹谷さん、常連だった寺本巖さん、能田成さんが次々と他界され、やがて、立ち消えとなってしまいました。

こうした中、去年の春、原田道雄さんからあの笹ヶ峰音楽祭をもう一度開催したいという話が沸き上がり、それではと、笹ヶ峰音楽祭にたびたび出演いただいていたピアニストの別所ユウキさんにお声がけしたところ、快諾をいただきました。共演者は別所さんの音楽仲間のクラリネットの高橋由有子さん、バスクラリネット

の仙臺玲さんに決まり、開催場所は、当然ながら京大ヒュッテはかなわず、代わりに原田さんのご自宅近くの大津市石山のフィガロホールとなり、この間多くの方々の協力も得て1月の開催にこぎつけることができました。演奏会当日の運営にはたくさんの現役の山岳部員が京都から駆けつけて手伝ってくれることになりました。

来場者は、山岳部OBと現役および関係者、種々山岳会メンバー、一般の方々、年齢層は別所さんのお子様の幼稚園児から、齢90にもなる会員上尾庄一郎さん、川崎徹さんご家族、お住まいも遠くは群馬県や関東地方近くは地元滋賀県と、多岐にわたり、ホールの定員が100名のところ総勢77名と、ほぼ満席になりました。開演に先立って原田さんから挨拶があり、ピアノの演奏が始まりました。その後、クラリネット、バスクラリネットの演奏が続き、まるで笹ヶ峰高原の中にいるような感覚になります。間に、山岳部員から原田さんに思い出の厳冬期十字峡横断の記念品が贈られ、最後は、全員で山の歌を合唱し大いに盛り上がりました。閉演後、懇親会場にも多くの方々が詰めかけ旧交を温め歓談を楽しみました。

「笹ヶ峰メモリアルコンサート」の経費の多くは原田さんのご支援で賄っていますが、そのほか多くの方々からご寄付をいただいております。併せて20万円ほどの剰余金がありました。これは、山岳部の活動資金に使っていただこうと思います。

2026年度の総会は5月30日京都大学時計台で開催予定です。是非ご参集をお願いします。

編集後記

前号では「今冬最強・居座り寒波のただなか」とお伝えしました(1月22日)。当地、高田(上越市)は2月上旬までは降雪が続き、積雪深166cmに達しましたが、そのあとは一転して気温高めで降雪はほとんど無く、住民としては助かりました。すでに暖候期予報(6月~8月)が発表されています。夏には限りませんが、災害発生につながったり、農産物に悪影響を与えたりするようなことのない天候を願っています。

安仁屋さんから、チリへのスキー旅のお話を

いただきました。いつもながら行動力には驚くばかりです。読者への情報として経費が細かく書いてあります。長年にわたるパタゴニア氷河調査の写真、資料、成果などを現地機関に寄贈されたのはすばらしいことと思います。

斎藤清明さんには同級生山本紀夫さんの著書を紹介していただきました。こちらも長きにわたるフィールドワークの成果です。

北大・京大交流会に参加されたAACHの方々からご寄稿いただき、ありがとうございます。小泉章夫さんが名誉会員・田中喜左衛門さんの曾孫とは驚きでした。田中さんについては今西錦司さんに「田中さん」という一文があります(注1)。また、平井一正さんも「AACK人物抄」で紹介しておられます(注2)。八木欣平さんからは「AACH」の由来について、過去の資料をたずねてとりまとめられた貴重なお話をいただきました。そこにもうかがわれる北大・京大の縁の深さを大切に、交流をさらに深めたいものです。

注1:今西錦司(1950)「田中さん」山と探検、岡書院、
「山の随筆」旺文社文庫(1979)に収録

注2:平井一正(2005)「田中喜左衛門」AACK
Newsletter No.37

原稿送り先:横山宏太郎

発行日	2026年3月31日
発行者	京都大学学士山岳会 会長 幸島司郎
発行所	〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学総合博物館 高井正成 気付
編集人	横山宏太郎
製作	京都市北区小山西花池町1-8 株式会社倉事務所